

中部支部

胸部外科 和田源司, 半沢 備
同 呼吸器科

大田迪祐, 後藤育郎

昭和51.1.より56.9.迄当施設における原発性肺癌289例のうち Warren & Gatesの重複癌診断基準に従った肺癌との重複癌症例は10例である。他臓器との重複癌が9例(胃癌7例, 上顎癌, 膀胱癌各1例)で, 肺内重複癌が1例であった。1年以内発症を同時発生, 1年以上の間隔ある症例を異時発生とすると前者が4例, 後者が6例であった。この他乳癌の転移か原発性肺癌か鑑別困難であった1例を供覧した。

10. 血清ならびに, 尿中高アミラーゼ活性を呈した原発性肺癌(腺癌)の1症例

県西部浜松医療センター

呼吸器科 後藤育郎, 大田迪祐
同 胸部外科

和田源司, 半沢 備
症例. 78才, 男性。

1951年, Weissにより, 腺ならびに唾液性疾患を伴わない肺癌患者で, 血清アミラーゼ活性が高値を呈するものが報告されて以来, 本邦においても, 若干の報告を散見するが, 我々も, 血清および, 尿中に高いアミラーゼ活性を呈した, 原発性肺癌(腺癌)の7例を経験したので, 文献的考察と合せ報告した。

11. ACTH-BMSH-Calcitonin 産生を示した肺小細胞癌の1例

名古屋第一赤十字病院内科

赤尾幸博, 斉藤 博, 酒井秀造
小林 卓, 石下泰堂

同 病理 宇野 裕
国立がんセンター研究所

安達 勇, 阿部 薫

症例: 74才, 男, 呼吸困難, 血痰にて入院。喀痰細胞診より小細胞癌と診断した。臨床的に

肥満, 皮膚色素沈着, 軽度空腹時血糖の上昇を認めた。血中カリウム, カルシウム値は正常であったが血中ACTH, BMSH, Calcitoninは高値を呈した。患者は化学療法, 放射線療法を行うも効なく, 心不全にて第108病日に死亡した。剖検時摘出腫瘍組織中においてもACTH, BMSH, Calcitoninは高値を示した。

12. 原発性肺癌症例の臨床経過における血清カルチトニン値について

浜松医科大学第2内科

千田金吾, 早川啓史, 川勝純夫
今井弘行, 佐藤篤彦

前回原発性肺癌において, 血清カルチトニン値は, 有意に高値であり, 病勢の把握, 治療効果の判定, 再発の発見に有用であることを報告した。今回各種治療別に臨床経過と血清カルチトニン値を検討した結果, 手術例では当初より高値のものは, 郭清後正常域に戻った。放射線治療例では, 予定照射後平均約80日後に最低値となった。一方全身療法である化学療法例では, 治療後速やかに低下した。甲状腺等の障害でなく治療効果と解析された。

13. 肺癌における血清フェリチンの臨床的意義

愛知県がんセンター病院

臨床検査部

有吉 寛, 桑原正喜, 須知泰山
同 第2内科 坂 英雄

浦田淳夫, 西村 穰, 太田和雄
同 第2外科 国島和夫

名古屋市立大学第2内科

森下宗彦

肺癌におけるtumor markerとしての血清フェリチンの検討を行い, 対象として正常と肺結核, サルコイドーシス, 肺炎とを比較した。肺癌における陽性率は

58.1%であり, Stageの進行と共に上昇し, 扁平上皮癌に高値を示した。

14. 髄膜転移の疑われた肺癌の1例—髄液中CEA濃度の測定意義について—

名古屋市立大学第2内科

柿原秀敏, 松原充隆, 森下宗彦
小島章弘, 山本正彦, 杉浦孝彦
高田勝利, 鳥井義夫, 青木 一
市村貴美子, 橋上 裕
鈴木雅之

症例は64才主婦。56年1月左胸水貯留を来し入院。ADMとNocardia-CWSの胸腔内投与により胸水消失。同年7月より頭痛を訴えた。CTでは明らかな転移巣は認められなかったが, 髄膜のびまん性転移が疑われた。髄液中CEAは55ng/mlであり, 血中CEA(13ng/ml)に比して著しく高値を示した。剖検で髄膜に肺癌の転移を認めた。髄液中CEAは髄膜転移の補助的診断法として有用と考えられ, 今後の症例の蓄積が望まれる。

15. 脳転移を来した肺癌治療例三重大学第3内科

福喜多茂夫, 南 昭治

服部 徹, 笠井寛司, 高橋良太
田口 修, 柏木秀雄, 宮地一馬
脳転移を伴った肺癌例を報告する。

症例1: 55歳女性。入院約1か月前に右片麻痺を来し, 右肺S₆の腺癌腫瘍と左側後頭葉, 頭頂葉, 左小脳に転移を認めた。化学療法とともに頭部放射線照射を施行し, 7か月後片麻痺は軽快し現在生存中である。

症例2: 61歳男性。左上葉小細胞癌で照射治療により軽快退院。4か月後に嘔吐を来し, 小脳に転移巣, 脳室拡大を認めた。脳室腹腔シャント施行後, 頭部照射によりこの転移は消失し,